

2015

地域×大学=
域学

いきがく



高知県立大学

県外から来て、
三里のことを
思ってくれる。
たいしたもの！
すごい！
やさしい心を持って、
お年寄りに好かれる
人間になつて！

地域



秋田光洋さん

高知市消防団三里分団種崎部部长。自営。イケあい地域災害ボランティアセンターが主催した「未(魅)災地ツアー」や「みさとフェア」、三里地区の避難訓練、防災倉庫の点検などで、学生たちを指導・助言してくださっている。

自分が安心して
住める場所を
見つけました。
大学を
卒業しても
三里に住んで、
ここで
生きていきます。

学生



芝田早紀子さん

看護学部4回生。大阪府出身。高知市消防団三里分団員。イケあい地域災害ボランティアセンター前代表。卒業後は、南国市内の病院に勤務しながら、仁井田地区に居住する予定。

「県民大学」による「域学共生」

「県民大学」の若い力―「立志社中」

高知県立大学は、「県民大学」としての歩みを続けています。教員は地域のみならずと協働しながら、県内各地で地域振興に取り組んできました。また、平成25年からは、地域の課題解決に主体的に取り組む学生を大学として支援する「立志社中」をスタートさせました。若さにあふれた企画力と行動力で、学生たちは地域の‘元気’に力を発揮しています。

地域と大学の新たな関係―「域学共生」という考え方

従来、私たちは、このような活動を「大学の地域貢献（社会貢献）」と呼んできました。「大学が地域を変える」活動です。

そういう活動を続ける中で、私たちは気づいたのです。それは、「学生や教員たちが地域で育てられている、学ばせてもらっている」ということです。「地域が大学を変える」ことを実感しています。

このような経験から、高知県立大学は新たに「域学共生―大学が地域を変える。地域が大学を変える」という理念を掲げました。地域と大学が互いに手を携え、教え合い、学び合い、育ち合いながら、高知県の地域の再生と活性化を実現したいという想いを込めた新しい言葉が「域学共生」であり、地「域」と大「学」が「共」に「生」きていくという考え方です。

地域と大学をつなぐ「域学共生コーディネーター」

その実現のために、地域と大学をつなぐパイプ役となるのが「域学共生コーディネーター」です。地域課題の「御用聞き」として、高知県内を回りながら活動しています。

「課題解決先進県・高知」を目指して、地域のみならずととも力を合わせて取り組んでいます！

域学共生コーディネーター
和田 剛



地域×大学= 域学

いしがく
①

[ミッション]

防災活動での学びを通じて 大学・地域の防災力を高める!!

[チーム名]

イケあい地域災害学生ボランティアセンター

活動の目的

高知県内で災害が起きた時に災害ボランティアセンターと連携してボランティアコーディネートを行うこと。また学内や地域での防災啓発を行うことを目的としている。

大学のある三里地域での地域活動に重点を置き、地区運動会・みさとフェアへの参加だけでなく、地区総会・避難路整備や点検、バーベキューなど地域に密着した防災活動を目指している。

また女子比率が9割という特性を生かし「女性や子どもの視点でつくる避難所運営」研修や応急救護、要援護者支援、非常食など学部の特性を生かした防災活動とともに県内3大学の連携を視野に置いて活動をしている。

[構成]

学生63名

(文化学部、社会福祉学部、健康栄養学部、看護学部)

教職員2名



学生と地域がつながるコラぼうさい (コラボレーション+防災)

池キャンパスのある三里地域は、南海トラフ地震では家屋倒壊や津波による甚大な被害が想定されると同時に防災活動が活発な地域でもある。

東日本大震災をきっかけに、防災サークル「イケあい」が結成された。「災害に強い大学を目指す」という大学の後押しもあり、2012年



9月に岩手県沿岸への復興支援バスを運行し学生48人が参加した。復興支援活動を体験した学生たちの多くが防災サークルに加入。復興支援活動を通じて地域での日常のつながりが重要であることを学び、地域と学生がつながる土壌が醸成された。

これまでは当日のみの参加だった三里地区運動会に企画会議から参加し防災リーの企画提案なども行った。地区運動会への主体的な関わりをきっかけに信頼関係が生まれ、津波避難路の整備や点検を兼ねたハイキング、地域でのバーベキューにも参加するようになり、三里小学校での防災授業では岩手県での復興支援活動について発表するなど、地域・学校とのつながりができた。

一方、郡部に大学がなくつながりが持てないとの声もあり、最大34mの津波が想定されている黒潮町との連携を模索し、黒潮町福祉まつりに参加している。また、地域以外でもNPO中間支援組織と連携し広島土砂災害支援や「女性や子どもの視点でつくる避難所運営」研修など、他分野と連携して防災課題の解決に取り組んでいる。

こうした取り組みの成果として、「ぼうさい甲子園・ぼうさい大賞」や「輝く女性応援会議」での登壇、防災研修でのファシリテーターなど、多方面から連携について声かけをいただいている。



地域と大学の「架け橋」に!

【三里みらい会議副会長】西森 茂

「地元で大学ができた!」ということで、池キャンパスの誕生はうれしかったですね。特に、三里まつりを一緒にやっていた頃は、本当に楽しかった。

南海トラフ地震が発生したら、池キャンパスに避難します。だから、日頃からもっと密着しておきたいですね。

三里みらい会議で、学生さんたちと協働しています。「みさとフェア」や運動会に参加してくれています。三里小学校で行われた泊まり込みの災害訓練の「夏の陣」「冬の陣」にも学生さんが参加していましたが、ああいう活動は大切です。イケあいのメンバーを見て、「将来県立大学に入りたい」という地元の子が増えたら良いですね。

高知医療センターと県立大学の合同災害訓練に地域住民も参加しています。だから思うのですが、もっともって三里地区の住民と大学の距離が縮まってほしい。かつての三里まつりのように、大学のキャンパスを使った日常的な交流がたくさんあった方が良いと思います。

イケあいの学生さんたちには、地域と大学の「架け橋」になってほしいですね。



学生 の声

三里地区は「社会の学校」です!

【文化学部2回生】小林 美輪

英語の教師になることを目指して、京都から高知県立大学に来ました。

1回生の夏、東北の被災地を支援するボランティア「夏銀河」に参加しました。「3.11」以来、被災地に行ってみたくて思っていました。もっと復興が進んでいると思っていましたが、実際に行ってみると、まだ野原のままです。「この景色が高知でも起きるかもしれない」と、南海トラフ地震が心から怖くなりました。

三里地区は住民の防災意識がとても高い地域です。私たちは防災のイベントに参加したり、運動会やお祭りでも仲間に入れてもらっています。みなさんとてもやさしくて、学生を大切にしてくださいませ。

私にとっての三里地区は、「社会の学校」です。社会人になるとさまざまな世代の方たちと接することになります。防災活動をきっかけに、多世代のみなさんと協働する方法を教えてください。学生が地域で、企画から参画させてもらうことは貴重な体験です。

京都に帰った後に「南海トラフ地震が発生したらどうするか?」。もちろんできるだけ早く駆けつけます!

地域 の声



平成25・26年度の主な活動

活動が認められて全国表彰2回受賞!

※ぼうさい大賞受賞(ぼうさい甲子園:25年度)

消防庁長官賞受賞(防災まちづくり大賞:26年度)

◎三里地域での活動

みさとフェアへの参加、三里地区運動会の企画会議への参加と当日参加。避難路整備に参加など地域の各種行事に参加。三里小学校での防災授業で発表。

◎黒潮町福祉まつりへの参加。三陸産ワカメごはんの提供と大槌町ストラップの販売

◎女性や子どもの視点でつくる避難所運営研修の実施(NPOとの共催)

◎未災地ツアーの実施(県外学生17名が参加。文部科学省事業とタイアップ)

◎朝倉地区防災展への出展

◎輝く女性応援会議in高知で登壇(内閣官房・高知県主催)

◎南海地震フォーラムでの登壇(須崎地区でのまち歩きの実践とフォーラムでの登壇)

◎広島土砂災害支援:義援金(514,473円)とタオル支援(9,090枚)

◎高知県主催の自主防災組織リーダー研修等にファシリテーターとして参加



「学生たちの急成長に驚いています」

【担当職員】学生課チーフ 山崎 水紀夫

東日本大震災では、支援に強い関心はあるが費用や日程の確保がネックになり、一歩が踏み出せない学生が多いことを知りました。背中を一押しする必要性を感じ、防災サークル結成、復興支援バスという環境までは整えましたが被災地支援を体験してからの学生主体の動きは目を見張るものがありました。

三里地域の活動に積極的に参加し、消防団員になった学生も(女子)。そうした中、「未災地ツアー」を実施。この活動が高い評価を受け、結成わずか2年で大学部門の最優秀となる「ぼうさい大賞」を受賞するまでに成長しました。これも学生と共に歩んでいただいた地域の方々への支援があればこそ受賞だったと感謝しています。



地域×大学= 域学

いしがく

②



[ミッション]

イベントを通じて 中山間地域の再生と 活性化を目指す!

[チーム名]

活輝創生実行委員会

活動の目的

中山間地域の再生と活性化を目指して活動を続けている。

全国の中山間地域と同様に、少子高齢化・過疎化が進行している香美市土佐山田町平山地区と高岡郡佐川町尾川地区の現状を変えるために必要な「つながり・絆」を再生し、地域住民と協働しながら失われつつある活気を取り戻すことを目的としている。

名称の「活輝創生」には、中山間地域に生き生きと輝く活気を生み出したいという思いを込めている。

学生と教員が地域に出て、地域のみなさまと協働して地域の問題と格闘する。地域住民の夢を聞き、その夢を実現するためのお手伝いを続けている。

[構成]

学生31名(文化学部、社会福祉学部)

教員2名



「地域住民のつぶやきから始まった 中山間地域の活性化!」

活輝創生実行委員会の母体となった文化学部地域文化論ゼミが、廃校を活用した地域交流施設「ほっと平山」でゼミ合宿を行った。その際、学生たちが廃校を利用した地域活性化の事例を調べて「ほっと平山」の職員らに向けて発表したことをきっかけに交流が始まった。

地域の課題を聞きに行くというフィールドワークを行ったとき、ある学生が「石窯で焼いたパンを食べたい」という女性のつぶやきを聞いてきた。そこから構想は進み、「地産地消のピザを焼くための石窯を設置する」という課題が生まれ、学生が獲得した助成金を資金に、平成24年10月に石窯を設置した。さらに、「ほっと平山」と協力して、休耕田で小麦を栽培し、その小麦粉で焼いたパンやピザ、地元の食材を使った料理を楽しむ「収穫祭」を実施している。この開催にあたって、学生が助成金を得ている。

この地域では、旧平山小学校が廃校になってから地区運動会が開かれていなかった。あるとき、地元のお年寄りが、「もう一度運動会をしたい」とつぶやいたことから、学生が地域住民を巻き込みながら企画・準備し、平成24年11月に「平山大運動会」を開催し、毎年続けている。このときも、香美市からのまちづくりのための助成金を得ている。

運動会の復活を契機に、廃校になってから開かれていなかった夏祭りを復活する機運が地域住民の中で高まったので、学生たちが企画、寄付集め、開催準備、当日の運営などを手伝って、平成25年8月に復活した。

このような活動を通じて、学生は中山間地域が抱えている課題の深刻さを認識し、平山地区の全戸を対象に集落調査を実施した。調査結果を平山地区住民の代表に報告し、地域住民の中で、課題の共有と解決に向けての話し合いが始まっている。

平山地区での活動を知った佐川町の職員が、担当教員に協力を依頼したことがきっかけで、佐川町尾川地区の集落活動センター「たいご岩」との交流が始まっている。活動はまだ緒に就いたばかりだが、地域の広報紙「おがわたより」の復刊など、成果もあがってきている。

学生のおかげで、 世代間交流が進んだ!

【地域交流施設 ほっと平山前代表】山崎 周作

平山小学校があった頃は、地域行事などで多世代の交流がありました。でも、廃校になってからはそれがなくなりました。同じ地域で暮らしていても、若い人とお年寄りが一緒に話す機会はあまりなかったです。

でも、学生さんたちがイベントに来て活動し、懇親会に参加してくれると、世代を超えて地域のことを話すようになりました。若い人たちは、年配の人たちが話を聞いてくれるようになったと喜んでいて、地域にとってはとても大きな力になっています。

私たちだけで話しても、やれないことばかりしか考えない。後ろ向きの話ばかり…。でも、学生さんたちと一緒に、前向きな話になる。廃校以来途絶えていた運動会や夏祭りを復活してもらって、元気が出ました。石窯も作ってもらい、地域外の人たちとの交流の機会も増えた。いろんなことをやってくれて、本当にありがたいです。

学生のみなさんは、中山間地域の厳しい状況を肌で感じてくれたと思います。卒業したら、高知県に限らず、できれば地域で仕事を見つけて、地域に残ってほしいですね。



地域の
声

学生
の声



平山は私の元気の源です!

【文化学部4回生】岡崎 史花

高校までの私は、本番でいつも力が出せませんでした。でも、今は違います。平山で地域のみなさんと関わり、まちづくりイベントを担うことで、そういう欠点を乗り越えられました。

「平山大運動会」で初めてイベントの運営に関わりました。以後、桜祭り、復活夏祭りなど、精力的に参画しました。

7ヶ月間かけて育てた平山産小麦を使い、高知新聞厚生文化事業団の助成金を得て開催した「収穫祭」は、やりきった感がありました。

イベントのたびに、地域のみなさんが喜んでくださって。そのたびに、信頼されていったと思っています。みなさんの笑顔が違います。通うたびに、「また来てくれた」と、地元の方の表情が明るくなる。顔がほころぶんです。それが力になりました。期待されるとうれしい。期待に応えられたらもっとうれしい。地域のみなさんに「ありがとう!」と言ってもえたら、もっともっとうれしい。

平山は不思議なところです。少し元気がないときでも帰り際には「また頑張ろう」って気持ちが変わるんです。卒業しても、平山とのご縁は続けます!

平成25・26年度の主な活動

中山間地域をまちづくりイベントで元気に!

◎石窯の設置

◎地域の伝統行事の復活

①平山大運動会の復活と継続開催②平山夏祭りの復活と継続開催

◎平山地区における集落調査と報告書の作成・提言

◎「平山産小麦収穫祭」の企画・イベント開催

◎「地域交流施設『ほっと平山』の事業に関する提言」の作成・提言

◎「平山地区の今と未来を考える会」の参加・協力

◎高知県芸術祭「平山ノート」の参加・協力

◎平山地区における「桜祭り」の企画・参加・協力

◎尾川地区の広報紙「おがわだより」の復刊

◎尾川地区秋祭りの参加・協力

◎尾川地区小麦イベントの企画・参加・協力

◎四万十市片魚地区ふるさと祭の参加・協力

◎本山町上関奉納相撲の参加

◎高知南高校「マネジメント学習事前学習」の企画・運営



学生は地域で生き方を学ぶ!

【専任教員】地域教育研究センター教授 清原 泰治

ある学生に聞かれました。「活輝創生実行委員会は夏休みがないのですか?」と。もちろんあります。でも、学生たちは休み中も足繁く地域に通い、課題解決に向けて話し合い、活動しています。やり遂げたときの感動はすばらしく、それゆえに学生たちは地域の課題と格闘しています。平成26年度からは社会福祉学部の学生も加わり、活動の幅が広がりました。立志社中の他のグループとも協力関係ができて、楽しさがさらに高まっています。

地域のみなさんは好意的で、学生を育ててくださっています。もちろん、厳しいことを言われることもあります。そういう中で、学生たちは社会の現実を知り、生き方を学んでいます。キャンパスでは学べないことが、地域にはあります。



先生
から